

「哲学」は教科教育にどのように寄与するか

国語の授業で「哲学対話」を掲げておられたのが目に留まりました。私がたまたま夏に、哲学者の苫野一徳氏の講演会に参加した際、氏が述べられていた次の言葉が頭の中で強く想起されました。

「哲学とは、普遍性を見いだし合うための思考のアートである」



今日の授業では、「友情とはそもそも何か」という本質的な問いを子供が立て、「知人」から「大親友」に至るまでの関係性のグラデーションを通じて議論が展開されていました。

これは、叙述に基づいて2人の人物の関係性を語る中で、その奥にある友情を友情たらしめている共通の了解（普遍性）を、まさに対話によって「見いだし合う」営みであったように私には映りました。

基礎的スキーマをいかに想起させるか

算数科において、長方形や正方形といった既習の図形に関する基礎的スキーマをいかに想起させるかという導入の工夫は、その後の具体的思考の拠り所となり、新たな具体的スキーマの形成を促す上で不可欠であるという議論がなされました。そして、その具体的な思考の過程において、教師が既存のスキーマとの間に認知的葛藤（ズレ）を意図的に生み出すことが極めて重要となります。このズレから、子供たちが「なぜ？」と自ずと問いに動かされ、「解けた時の達成感や心地よさ」といった情動を伴う算数のよさを実感していくのでしょうか。



この情動と葛藤こそが、能動でも受動でもない「ゆらぎ」（中動態の状態）を生み出し、最終的に、図形概念などの鍵概念を働かせて、普遍的な原理を捉える抽象的スキーマへと架橋されていくと私は考えましたが、皆さん、いかがでしょう。

（木村 仁）